

NO.177

全 仏

5 / 47



(大祭で賑わう成田山)

現代人の問題と仏教

真宗大谷派源隆寺住職

白 川 良 純



「みどりの草と、きれいな川、かがやく目と、どのような色であろうとよい顔色の子どもたち、こずきまわされずに自分

自身でいられるようなひとびと——こういった少数のことのためには、他のすべての政治的・経済的・技術的便宜を忘れてしまってもいいとさえわたしはおもいはじめている」。

これは、アメリカの反抗するわかい世代に支持されている社会学者ポール・グッドマンの「新しい宗教改革」(片桐ユズル氏訳)の一節である。

進歩だ、発達だといって夢中で進んで来た人類が、今や大きなつまずきを意識しはじめ、戸惑い、ためらっているとき、わかものたちは、それを敏感に感じとり、健康的で新しい空気を吸いたいと思うのは当然のことであろう。

しかし、その方法がはっきりしないし、それをこなして現実化するだけの実力もない。だから自分たちが目指している社会のあり方をじっくり考えるよりも、まず、ともかくこの現状を打ち壊して、それから何かを生み出そうとしている。したがって破壊のエネルギー

は極めて独善的で狂気を帯びた方向に向ってしま

う。
「歴史は繰返す」といわれるが、同じ時は、再び帰らず、一度行なったことは、もはや取消すことはできないのだが、わかものたちは、人生は何度でもやり直しがきくように思い込んでいるのではないかと思われる。連合赤軍のリンチの犠牲者は、再びこの世に生きることはできないし、殺人を犯したという事実は、永久に打ち消すことはできない。

歴史の意味について、今日深い反省が求められるのも、この敵愾な事実があるからである。一刻も止まることを知らない歴史の流れ、そのなかに生き、そのなかで行動しながら、その意味を明確にすることは、至難のことである。われわれは、すべての社会事象について、常に深く反省し、淀みかかるとものを打ち破って行かなければならないが、しかしそこには明確な方向づけが必要であり、ただ外に向って叫ぶだけで、肝心の足もとを忘れたものであってはならない。

何ものをも否定し否定しつくそうという般若空の思想が、空観という実践においてはじめて意味を持つものであることは申すまでもない。ただ破析に終るだけであっては、人間の教にはならないであろう。常啼菩薩の無生法忍の実践こそ空観の行といわれるように、法の真理にかなう実践でなければならぬ。

現代は、人間の悪い面である欲望を肯定し、助長し

て、しかもそれを隠そうとする恥じらいの心も忘れ、むしる顯示して、束縛から解放されたと錯覚し、独自の自己主張に終始しようとしている。わかものたちは、既成の社会的体制を目の仇にしているが、一部のものは結局、人間の弱点である煩惱のとりこになってしまっている。ミイラとりがミイラになったのと同じであろう。

現代は非人間的な時代であるという。人間は疎外され、ほんとうに生きていくという実感を持つことができず、人間の意志や感情とは関係ない、全然別のものが歴史を動かす、あれよあれよという間に飛んでもないことになってしまっているのではないであろうか。そういうことを強く感ずるものが、現状にあきたらず、何とかしなければならぬと焦る気持は分らないでもないが、理想とそれを実現する方法について深い考えを持たず、無暗やたらに破壊しても、かえって傷を大きくするばかりである。そのことは、連合赤軍の事件が、深い傷みをもってわれわれに教えてくれた。

テレビで公害の問題を扱っているのを見たとき、川辺に生える芦も川の水を浄化する働きをもっているという、微妙な自然のしくみのすばらしさに驚いたのであるが、人間は川べりをコンクリートで固め、汚水を流し、ひとりよがりの振舞をして、自然を破壊している。恐しいことだ。

自然は、それこそ自然に任せておけば一番よいのだが、人間はいろいろな力を加えて自然を破壊し、自己の生存を望みながら、自己の破壊をもたらそうとしているように見える。人間の智慧が浅はかだからといってしまえばそれまでだが、破壊への道を進むより仕方がないのであろうか。

俱舍論には、成劫・住劫・壞劫・空劫の四劫を一大劫とすると説かれているから、インドにおいては、古くから人類絶滅の時が来ると考えていたと思われる。

かつてこの地球上にのさばっていたマンモスも絶滅したように、人類にも絶滅の時が来るであろうことは、十分考えられることである。

人間が最後の一人になるまで、なすべからざることをなすなす、なすべきことをなし遂げるだけの、しっかりと精神を持ち続けることができるかどうか、はなはだおぼつかない。

いまそんなことを考えるのは空論に過ぎないといわれるかも知れないが、それを意識するか、しないかは今日の日常生活にも大きな影響を持つことであると思われる。多くの人は、そんな恐しいことは、考えたくないであろう。人類全体の問題となれば、ことは余りにも大きく、かえってピンと来ないかも知れない。

この頃は、死の問題がいろいろな形でわれわれに迫ってくる。川端康成の自殺もショッキングな事件であった。人命尊重を金科玉条として考えるならば、殺人は勿論、自殺もまた悪である。古代アテナやテーベの法律では、自殺者に対しては葬儀を行わず、その身分・地位を剥奪することを規定しているという。

しかし、余程の事情がなければ、自殺するわけもないのであるから、他人がとやこういうことはできないし、またいっても仕方のないことである。その苦しみを思えば、誰が死者に鞭をうつことができるであろうか。川端康成の場合にも、その原因がいろいろ取沙汰されたのであるが、その中に、仏教思想の影響があるとも言われた。なる程、ノーベル賞受賞記念講演である、「美しい日本の私」を読むと、道元、明恵、西行、良寛、一休、親鸞について語り、良寛の辞世や、芥川龍之介の遺書も引き、一休禪師が二度も自殺を企てたことについても触れている。

仏教では、生死と一口にいつても、生も死もともに迷いの世界とし、それを超えて悟りの世界へ行くことこそ人間の完成とされているのであるから、肉体の生

と死とかの区別は、それ程に問題にすることはないと考えられるかも知れない。

仏教は五戒の第一に不殺生戒を挙げていることでも分るように生命を尊重することも確かな事実であるが阿羅漢の中には、さとりから退失することを恐れて自殺しようとする想法阿羅漢もあるといわれる。さとりがまず第一義の目的であるから、肉体の生死より、さとりが優位と考えられるわけである。法隆寺の玉虫厨子の台座の絵で有名な雪山山婆羅門の話も、身を投じて法を求めざる菩薩の精神を伝えている。

肉体的な生は、いつかは必ず打ち壊され、死を迎えることは間違いない。しかし、ひとたび失われた生は再び取り戻すことはできないのであるから、それは絶対的な価値を持つていることも確かである。それをつずめて行くなら、生ある者はいつも死に直面しているのであるから、一瞬一瞬が、貴重な絶対的価値を持っていることになるであろう。それ故、われわれがほんとうに生命を尊重するなら、一瞬一瞬を大事にして行かなければならない。一瞬に永遠の価値があるというのは、この一瞬が絶対的なものだからである。

宗教的な意味の永遠は、時間的に限らない永遠ではなく、時空を超えた絶対的な世界について言っているのである。そうでなければ、永遠ということばは、人間の限らない欲望に媚びる誘惑のことばに過ぎないであろう。仏教では、涅槃の世界あるいは大涅槃界という方が適切であるが、時間的表現を借りれば、永遠といつてもよいであろう。

仏教は肉体の生死を軽く見ているというようなことではなく、われわれが煩惱をもって、生と死と執着しているところに迷いがあると教え、人間のほんとうのあり方を明らかにしようとしているのである。仏教はありのままの姿をありのままに見ることが基本であるから、人間のそういうあり方を、素直に明らか

にすることができるといえる。

川端康成が感じていた世界も、仏教が縁となっていることは確かであるが、人間の本质そのものについて感じとっていたと思われる。

人間の世界は、余りにもゆがみ、ひずみ、粉飾、虚飾が多い。それが個人から集団になると、たちまちに増大してしまう。まことに不思議なほどである。最も純粹であるべき宗教も、教団となり教派になると、全く本質から離れて、飛んでもない方向に走ってしまう場合が多く、虚偽と真実の見境さえつかなくなってしまうから恐しい。

そのようなことに堪えられない人は、醜悪さから逃れようと、孤独の殻のなかに閉じ籠って、時には自殺をもしかなれないことになる。

破壊すべき当の敵は、われわれの心にひそむ煩惱であるが、われわれは、集団をつくって社会的生活を営むとき、たちまちにしまいついてくるものもろの悪を打ち破り、現代社会に向ってほんとうに明らかにすべきことをはっきりさせなければならぬ。

「いまのわかものは……」と、頭ごなしにどなりつけるのではなく、わかものたちの感じているところに耳を傾け、人間の真実のあり方を求めて行かなければならない。

その努力によってこそ、不安定ななかに安定を、不調和のなかに調和を見出すことができると思うのである。

(全日本仏教会文化専門委員)



WFBセイロン大会

日本代表団三十名出発

21日羽田

第十回世界仏教徒会議セイロン大会はいよいよ来る五月二十三日から二十六日の四日間、首都コロンボ市において開催されるが、全仏(WFB日本支部)では星谷理事長を団長に三十名の代表団を派遣することになった。

代表団一行は、五月二十日三時から浅草大仏堂(浅草観音裏)において結団式壮行会を開催し、翌二十一日(日)午前十時羽田発のBOAC九一一便でコロンボへ直行する。三十日までセイロンに滞在し、会議に参加、仏跡を巡拝して、三十一日タイ国バンコクに入り、六月一日夜東京に帰ってくる。大会は会議に先立

つ前日二十二日の常任理事会にはじまり二十三日からの会議は、セイロン首相の祝辞、WFB創立会長マララセーケラ博士の祝辞、ブーン妃殿下の挨拶等によって開会され、「仏教による世界平和」の大会テーマのもと各国支部提案の諸議案が討議されることになっている。

なお、会議に四日間出席は星谷理事長麻布事務総長、花山勝友氏、出口正順氏、中山理々氏、松本貞竜氏、水本大岳氏の七名で、日本支部からは議案「ルンビニ」開発に協力しよう、「次期大会をハワイで開催しよう」の二件を提出する。団長以下団員は次の方々である。

団員

水本大岳



法華宗陣門流宗務
総長
東京都北区田端町
一一三

中山理々



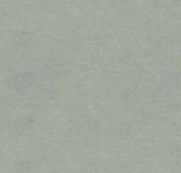
日本仏教鑽仰会理
事長
東京都北区赤羽台
三ノ二四ノ二

花山勝友



武蔵野女子大学
東京都東久留米市
新川町一ノ二ノ三

松田亮三



円心寺住職
長野県伊那市美す
す三八八八

上田見宥



宝樹寺住職
大阪市住吉区墨江
東三ノ三九ノ三三

山田二三雄



梅金商店代表社員
名古屋市中区大須
三ノ三九ノ三三

田中政海



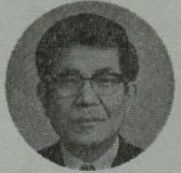
金乗院住職
埼玉県所沢市上山
口二二〇三

木村直三郎



不動寺住職
新潟県西頸城郡青
海町大字青海九一

寺田康順



真浄寺住職
東京都文京区向ヶ
丘二ノ二六ノ九

奈良日慎



雑誌主幹
横浜市港北区樽町
三四八

団長

星谷慶緑



全仏理事長
京都市下京区烏丸
七条上ル 大谷派
宗務所内

副団長

伊藤哲雄



東京本願寺輪番
東京都台東区西浅
草一ノ五ノ五

副団長

椎谷健



孝道教団事務長
横浜市南区若宮町
四ノ七六

副団長兼事務長

麻布照海



全仏事務総長
東京都港区元麻布
一ノ六ノ二一



金子貫達
聖徳寺住職
長崎市銭座町四ノ五九



出口正順
四天王寺庶務部長
大阪市天王寺区元町一七




松本貞竜
全日仏青副理事長
大阪市住吉区住吉町二三八



高橋菊夫
孝道教団浄真副支部長
横浜市保土ヶ谷区仏向町五一九



酒井タミ
孝道教団慈音支部長
横浜市南区睦町一ノ九ノ八



中沢ハル
孝道教団香泉支部長
横浜市鶴見区東寺尾町一九五七



山田ふみ子
孝道教団陽明支部長
川崎市中原区井田一三八一



山田和歌子
孝道教団長安副支部長
横須賀市田戸台六二



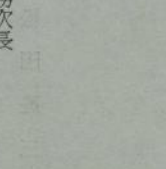
若月ふみ
孝道教団若月支部長
横浜市神奈川区鳥越五五



石井幸子
孝道教団日本橋副支部長
東京都台東区浅草馬道三ノ五



山田うしゑ
孝道教団
横浜市鶴見区北寺尾町二四〇



平等勝尊
善教寺寺族
横浜市港北区新羽町二三九八



黒川孝樹
事務次長
全仏国際部長
東京都台東区東上野六ノ一四ノ一二



名倉好子
事務局員
全仏国際局主事
埼玉県与野市大戸一一九八ノ一八



樹谷淳宣
全仏総務局主事
東京都港区高輪一ノ二七ノ四四



森喬
孝道教団湘南支部長
横浜市戸塚区新橋町二二四

添乗員
菊島輝男
千代田トラベル業務課長
東京都港区南青山五ノ六ノ二〇 千成ビル

日韓提携・韓国々宝を全巻刊行!

高麗大藏經 影印本

- 700余年を経た、超宗派の原典
- 写影であるから、一字一句誤りがない
- 全45巻、完璧な集録

ご要望に応じ、カタログをご送付します

アジア文化事業株式会社
東京都新宿区西新宿8-3-31 TEL.371-0125(代)

昭和四十七年五月一日発行
五月号 第一七七号

発行人 麻布照海 編集人 阿部顕瑞

発行所 財団法人 全日本仏教会
東京都台東区西浅草一ノ五ノ五(東京本願寺内)